



夢を求めて

人身取引被害者の思い

シリポーン スクロバネック編 ニー/ウアム/ユーン著



夢を求めて

人身取引被害者の思い

シリポーンスクロバネック編 ニー/ウアム/ユーン著

夢を求めて
人身取引被害者の思い

著者: ニー/ウアム/ユーン
編者: シリポーン スクロバネック

タイ語版



発行者: 女性財団
(Foundation for Women)
295 Jaransanitwong Rd, Soi 62
Wat Paolohid Bangplad, Bangkok, 10700
Tel. 02-433-5149, 02-435-1246
Fax. 02-434-6774
E-mail: info@womenthai.org
www.womenthai.org

2009年3月1日 第1版 2000部発行
2009年9月2日 第2版 4000部発行

発行支援団体: 国際労働機関(ILO)

日本語版



翻訳および出版：

JICAタイ国人身取引被害者保護・自立支援促進プロジェクト

(国際協力機構およびタイ国社会開発人間安全省、社会開発福祉局、人身取引対策部)



書籍デザイン スパトラ プルニウム
表紙デザイン シリラーワン ランターラー

印刷所 サームダーラー合資会社
ISBN 978-974-300-609-8

はじめに

人身取引は基本的人権と人間の尊厳に対する重大な侵害であり、世界の国が協同して取り組むべき課題です。タイ国は人身取引被害者の送出国、受入国、通過国であり、多くの被害者を受け入れ、送り出しています。このような情勢を踏まえ、タイ国政府は人身取引防止・撲滅のためのさまざまな取り組みを講じてきました。タイ国政府、社会開発人間安全保障省 社会開発福祉局 は人身取引に対する取り組みの中心的機関であり、これまでも多くの人身取引被害者の保護・支援にあたってきました。

日本とタイの両国政府は、協力して人身取引に取り組むために、2009年3月17日、5年間を協力機関とする国際協カプロジェクト「タイ国 人身取引被害者保護・自立支援促進プロジェクト (Project on Strengthening of Multi-Disciplinary Teams (MDTs) for Protection of Trafficked Persons in Thailand)」に署名しました。プロジェクトの実施機関は、日本側は独立行政法人国際協カ機構 (JICA)、タイ側は社会開発人間安全保障省 社会開発福祉局 人身取引対策部 (BATWC) です。このプロジェクトの目的は、多分野協働チーム (MDTs) の機能を強化し、被

受害者中心の保護・自立支援を進めることにあります。多分野協働（MDT）アプローチというのは、人身取引被害者に効果的・効率的なサービスを提供するためにタイ国政府が採用している方法で、関係するさまざまな政府・非政府機関が協働して取り組むやり方のことです。

この小冊子「夢を求めて」は、自分たちが経験した怖い、悲しい体験を語ってくれた3人の被害者女性の実話です。彼女たちは自分たちがどのようにして騙され、どんなひどい目に遭ったかについて、勇気を持って語ってくれました。彼女たちはタイに戻った後、二度と被害に遭わないようにと、新しく多くのことを学んだだけでなく、そのことを多くの人に知らせようと声をあげたのです。彼女たちは仕返しを恐れて沈黙を守るといふことはしませんでした。彼女たちの話は私たちの心を打つだけでなく、被害者だけがひどい仕打ちを受けるのはおかしいということに気付かせてくれます。現在、彼女たちはエンパワーされ、正義を追求しているだけでなく、他の被害者を支援していることには一層励まされます。

この小冊子の原本はタイ語で、2009年タイのNGOである女性財団（Foundation Women: FFW）により国際労働機構の支援を受けて刊行されました。JICAの「タイ国人身取引被害者保護・自立支援促

進プロジェクト」では、この冊子がより幅広い人びとに読まれるように英語に翻訳し、2010年英語版を刊行しました。人身取引の受入国である日本でも多くの人に読んでほしいと思い、この度、女性財団の許可を得て日本語訳を刊行することにしました。

プロジェクトでは、この本が人身取引被害の防止につながることを強く希望しています。また、この本を通じて多くの人びとが、人身取引被害者は単に被害を受けた弱い人なのではなく、人身取引の防止・撲滅に共に取り組むことができる大きな可能性を秘めた人たちであることにも気付いて欲しいと願っています。

プロジェクト・マネージャー

人身取引対策部長 Saowanee KHOMEPATR

プロジェクト・チーフアドバイザー

JICA 専門家 Yukiko ODA

目次

はじめに	
第1版の序文	11
第2版の序文	13
砕け散った夢 ～ ウアイの話	15
1. 子どもの頃	
2. 夢を追って	
3. 残酷な結末	
4. 新たな闘い	
問い	
正義を求めて ～ カンの闘い	30
1. 出発前	
2. 脱出	
3. 正義を求めて	
4. 新しい人との再出発	
問い	

新しい人生へ向かって ～ パーンの話	44
1. 悪夢のような日々	
2. 苦しみを乗り越えて	
3. 新しい人生に向かって	
問い	
人生を闘う女性グループ	53
女性財団	56

第 1 版の序文

「夢を求めて」は海外に働きに行き大変な苦難を経験した 3 名のタイ女性の実話です。彼女たちは出かける前は、家族と自分の明るい未来を思い描いて希望にあふれていました。しかし、結果は、自分と近しい人から搾取され、人身取引被害に遭ってしまったのです。

これらの 3 名の女性は、タイの女性の典型と言えます。教育を受ける機会も十分ではなく、若くして結婚し、家族を養う責任を負わされてしまいました。このような恵まれない女性、とりわけ農村部の女性の経済状況を向上するためのプロジェクトが数多く行われてきましたが、十分な収入向上にはつながりませんでした。その結果、多くの女性は海外に出稼ぎに行くしかなかったのです。

これらの 3 名の女性の話は、私たちに、国境を越えた女性の出稼ぎ労働者が人身取引の被害に遭わないようにするための方策を考える時のヒントを提供してくれます。加えて、法をきちんと施行すること、被害者の司法へのアクセスを高めること、関係機関が都市と農村の格差をもたらしている経済・社会的構造

の改革を促進することの大切さも教えています。さらに、ジェンダー平等の促進や家計を担う女性のさまざまな資源へのアクセスの向上という課題にも取り組まなければならないことも提起してくれています。

この「夢を求めて」は、女性財団（FFW）が国際労働機関からの支援を得て行ったプロジェクトの一環として行われた「社会復帰プロセス」に参加した女性たちの勇気ある語りから生まれました。この本により、より多くの女性たちが、海外出稼ぎのもつ危険性について気付いてくれることを祈っています。また、政府関係機関が海外への出稼ぎにより人身取引の被害者となった女性たちに正義をもたらし、彼女たちの再出発の支援のために、引き続き協力することを期待しています。

女性財団
2009年3月

第 2 版の序文

FFWが「夢を求めて～人身取引被害者となった海外出稼ぎ女性の実話」を発行した後、マスメディア、特に「女性から女性へ」というテレビ番組で取り上げられたことから、多くの市民、特に女性より関心が寄せられましたので、ここに第 2 版を発行することになりました。

この「夢を求めて」に多くの人に関心を寄せたのは、この本が被害者の実際の経験に基づいていたからです。被害者たちは、自分たちの話が、よりよい生活を求めて海外に出稼ぎに行こうとしている多くの他のタイ人女性への警告となり、海外での出稼ぎには労働搾取や性的搾取の危険があることに気付いて欲しいと思っていたのです。他の多くの女性同様この本の女性たちも、初めは海外への出稼ぎに美しい夢を描いており、親戚や近所の人のような近い人に騙されて被害者になるなどとは思っていませんでした。この 3 つの話からは人身取引の加害者のネットワークがコミュニティレベルから国際レベルにまでつながっていることがよくわかります。ですから、コミュニティではこのことを良く認識し、人びとを支援し保護することが大切なのです。もうひとつ大切なことは、

被害者の女性を見下さないことです。彼女たちはすでに心身ともひどく傷ついて苦しんでいるのです。

人身取引被害の経験を語ってくれ、私たちに人身取引被害者が勇気ある人であることを教えてくれた「人生を闘う女性グループ」(LOL)のユーンさん、ニーさん、ウアムさんに深く感謝します。彼女たちは人身取引の被害者となり、人生というゲームの敗者になったように見えますが、社会正義を求めて闘い続けてきました。彼女たちは、貧しいからといって差別されることのない正義がいつの日か確立することを希望しているのです。

FFWIはこの冊子の読者の皆様に深く感謝申し上げます。皆さまがこの問題に関心を持って下さっていることが、この闘っている3人の女性にとって力となるのです。私たちは、この本が新しい人生を歩みだせるように強くなりたい、他の女性たちが人身取引の被害に遭わないようにしたいと頑張っているLOLの女性たちにとっても大きな支えとなることを希望しています。FFWIは、「夢を求めて」第2版の出版にあたりご支援賜りました国際労働機関に深く感謝致します。

女性財団
2009年9月

砕け散った夢～

ウアイの話

1. 子どもの頃

私はタイ北部で生まれました。生まれてすぐに養女として貰われたので本当の親の顔は知りません。引き取ってくれた父母の間には子どもがいませんでしたが、養父には前の妻との間に子どもが4人いました。子どもころは、他の友だちと同じような暮らしをしていて、養父母は私を中学まで卒業させてくれました。そして、まだ 15 歳の時、後で結婚することになる男性と出会いました。

結婚後も、夫と一緒に私の実家で暮らしました。彼は私の両親に、前に結婚していたことがあるけれども前妻はずいぶん前に自分を捨てて行ってしまったと言いました。両親は私たちに 10 ライ(約 16,000 平方メートル)ほどの田んぼを分けてくれましたが、農作業は全て私一人でやらなくてはなりません。夫は毎日朝から晩まで発電所で働き、仕事が終わったら友だちの家に寄ってお酒を飲んだり、ビリヤードをしたりして、農作業は全く手伝ってくれなかったからです。農作業を手伝ってくれないだけでなく、酔

っ払うと私に暴力を振るいました。私はこのことは両親にも、誰にも言わずに黙って耐えていました。

17歳の時、病院の家政婦の仕事が見つかりました。しかし、働き始めて3ヶ月経った頃妊娠していることが分かり、仕事を辞めて家にいなければならなくなりました。その頃、両親の家を出て夫の両親の家の近くで暮らし始めました。

夫は嫉妬深く、妊娠中でも毎日喧嘩が絶えませんでした。私は夫以外に誰とも関係を持ったことはありませんでしたが、夫は酔っ払うとお腹の中の子は自分の子ではないのではないかと行って、私を責めました。私は、ただただ、お腹の子どものために我慢しました。

私は男の子を出産しました。夫は息子が欲しかったので大喜びしましたが、相変わらず毎日のように喧嘩が絶えませんでした。子どもが9ヶ月になったとき、義母に子どもを預けて県内のデパートでの店員として働くようになりました。給料は月3,900バーツでした。でも、私が稼ぐようになると夫は生活費を一切入れてくれなくなったので、水道代、電気代、子どもの養育費など全部私が払わなくてはなりませんでした。それだけでなく他の出費も半分負担しました。仕事はわずか3ヶ月の契約でしたので、私はまた新しい仕事を探さなくてはなりませんでした。幸いにも電

線工場の仕事が見つかりましたので、福利厚生が整った正社員となれるように一生懸命働きました。子どもの教育資金を貯めたかったのです。

私が生活費を稼ぐようになっても夫は私を罵ったり殴ったりして暴力を止めませんでした。失神するまで殴られたたこともありましたが誰にも言いませんでした。工場の正社員になったその日に私は子どもを連れて実家に戻り、夫と暮らした 3 年間ずっと自分の中に溜め込んできたことを全て両親に話しました。幸いにも母は理解してくれ、子どもの世話を引き受けてくれました。夫は仲直りしようと実家にやって来ましたが、私はもう十分苦しんで来まし、少しは強くなっていて、いつまた暴力を振るわれるかとびくびくしながら暮らす生活にはもう戻りたくないと言っていました。夫は子どもの近くにいたい、子どもを引き取りたいと言ってきましたがそれも断ったため、それ以後子どもの養育費は一切もらえなくなりました。

私は自分ひとりのわずかな収入で子どもを育てなければなりません。子どもが学校に行く年齢になった時、私に同情してくれており、子どもを可愛がってくれていた夫の姉が、高等教育を受けさせるからという約束で子どもを育てたいと言ってきました。義姉夫婦は 2 人とも教師で子どもはいませんでした。私は子どもを田舎の義姉に預ける決心をしました。

私も両親も息子に会えなくなるのはとても寂しいことでしたが、子どもの将来を考えれば、私と一緒に暮らすよりその方が良いと思ったのです。

2. 夢を追って

息子が義姉と暮らすようになった後も、私は同じ工場で働き続けましたが、仕事がだんだん少なくなり残業もなくなりました。ある日、これまで11年間も働いていて良い給料をもらっていた女性の上司が、仕事を辞めるという噂を聞きました。彼女に訳を聞いたところ海外に出稼ぎに行くつもりだということです。南アフリカで働いている彼女の友だちが、タイ人がオーナーのレストランとスパで働く人を探すためにもうすぐタイに戻ってくると言うのです。渡航費用として3万バーツぐらい払わなければならないということでした。彼女はすでにマッサージとスパで働くための訓練を受け、修了書も貰っているそうです。彼女は海外で働けば2・3年で、11年間工場働いたと同じくらい稼げると話してくれました。

私は息子と自分の将来のことを考えていましたので、3万バーツなければ行けないのかと聞きましたら、友だちに聞いてみてくれることになりました。そして2・3日たって3万バーツなくてもパスポートさえあ

れば行ける、費用は向こうで稼いだ分から差し引かれると伝えてくれました。また、南アフリカでは 1 時間 300~400 バーツ程度(1ランドは約6バーツ)は稼げると聞き、私も上司と一緒に海外に行きたくなりました。友だちや友だちの妹など何人か誘って見ましたが、中には騙されているのではないかと心配する人もいました。それでも私は、何万バーツもの高給を貰っている上司がもっと稼ぐために仕事を辞めて行くのだから騙されているはずがないと思っていました。

そしてついに仕事を辞める決心をしました。私は 35 歳の従姉妹と一緒にパスポートを申請し、上司に会いに行きました。上司は友だちが彼女の両親に会いにくるので、その後で私たちに会いに来てくれるということでした。彼女は私の従姉妹は年をとり過ぎているし、英語が書けないからだめだと言いました。その日、私は上司の友だちのジョイと会って、バンコクでまた会う約束をしました。上司は私の大きなスーツケースをバンコクまで車で運んでくれるよう友だちに頼んでくれると言いました。

私は両親に海外に働きに行くと言いましたが仕事を辞めたとは言いませんでした。両親は騙されるのではないかと心配して反対しましたが、私は既に決心し全ての準備をしていました。私はバンコクに行き親戚の家に泊まりました。

それから上司が教えてくれた電話番号に連絡してジョイに会いに行きました。ジョイは私を連れてタクシーに乗りました。大きなスーツケースはジョイが運んでくれたので、その時は自分の身の回りの物を入れた小さな旅行かばんひとつしか持っていませんでした。ジョイは私をホワイクワン辺りの親戚に連れて行きました。私の大きなスーツケースもそこにありました。ジョイはそれから私を買い物に連れて行き、その後その晩泊まるホテルへ連れて行きました。翌日もジョイは私を連れて買い物をしたり用事をしたりした後、今日出発するから午後 2 時にはドンムアン空港へ行くと言いました。

ドンムアン空港にはジョイの友だちがたくさん来ていました。一人はマックというオカマでオイとソーという 2 人の女性を連れて来ていました。そしてウイという人が後で遅れて来ました。ジョイに何人一緒に出発するのかと聞くと、女性は全部で 4 人、ジョイを含めて 5 人と言うことでした。空港で待っていた時 1 人の女性が挨拶に来ました。彼女は豊胸手術を受けるためについ 1ヶ月前に帰国してきたところで終わったらまた行くと言っていました。

私の親戚も見送りに来てくれました。彼女はバレンタインのプレゼントに時計を買ってくれました。親戚は私たちが飛行機に乗るまで見送ってくれました。手

続きは全てジョイがやってくれたので飛行機に乗るまで私たちは何もする必要がありませんでした。飛行機の中では私はオイの隣に座りました。彼女はまだ17歳でした。私たちは香港で乗り継ぎ南アフリカへ向いました。

3. 残酷な結末

南アフリカに着いて飛行機を降り、入国審査を受けました。しかし、入国管理官は私の入国を許可してくれなかったので、生後9ヶ月の子どもを連れて迎えに来ていたジョイの夫に身元引受証明を作ってもらい何とか入国することができました。

全て順調に行き、ジョイは私を彼女の夫や子どもと同じ車に乗せました。そして他の女性たちはタクシーでカジノへ行きました。ジョイは、ここの黒人の警察官はすぐにタイ人女性は売春に来ていると思うから、私たちは別々にならなければならないのだと言いました。家に着いた後ジョイの夫が女性たちをカジノに迎えに行き連れて帰って来たのでみんなで一緒にジョイの家に泊まりました。

二日目の夜、私は2人のタイ人女性に会いました。その内の1人は妊娠していました。2人は私に売春の

仕事をしなくてはいけないのだから気持ちを強く持つようにと言いました。彼女たちは初めからこの仕事をしなくてはいけないことを知っていましたが、今いる所がどこなのかも分からないので逃げることもできず耐えてきたというのです。

売春することになるなど考えてもいなかったのに、私は急に怖くなりました。私たち4人がジョイの家で買い手が来るのを待っている時、私はジョイが電話で話しているのを聞きました。私は背が高く体が大きいからどんな仕事に向いているとか、他の人たちはどこで働くのがいいとか話していました。その時私たちは誰もどうしたらいいのか、どこに逃げたらいいのか分かりませんでした。それにたくさんの借金を抱えていたので逃げ出すことは考えられませんでした。タイで使っていた電話は取り上げられ、ジョイから渡されたテレホンカードには僅かな金額しか入っていませんでした。私たちはジョイと彼女の夫に知られないようにこっそりと新しい電話番号を教え合いました。

到着して3日後、私とオイはジョイの家で会ったジャンというタイ人女性に1人1万5千ランド(約9万バーツ)で買われました。そして他の2人は別のところに売られました。新しいところにはすでに2人のタイ人女性が働いていました。1人は私と同じ県出身でもう1人はウドンタニ県出身でした。オイはまたすぐ

に別の所へ売られて行きました。彼女は 18 歳未満だったのでジャンは問題になるのを恐れたのです。

私は2人の女性と一緒にタウンハウスのような家で暮らしました。窓ガラスは全部しっかりと鍵がかけられており、家の前の芝生の庭だけが見えました。そこには大きな番犬が2匹いました。入口には電流が流れる電線が張り巡らされており、扉はリモコンで操作するしくみになっていました。私はこの仕事のことごとく不安でした。ジャンは2人に、私が何をしなければならぬのか教えるように言いました。

私の仕事は朝8時から始まりました。インターネットで注文してきた白人にマッサージをする仕事で、ジャンの夫がその家まで車で連れて行きました。その時は、私は英語を全く話せなかったのでマッサージだけして客と交渉して売春するところには出ませんでした。私が客を取ろうとしなかったのでジャンは私をバーで働かせることにしました。

私はここで既に8~9ヶ月働いていた同郷の女性2人に会いました。彼女たちは英語も上手で、初めから売春の仕事をする目的で来ていました。短期間でよいお金になるからです。同郷の人だったので信頼して私は2人にこんな仕事をするつもりでここに来たのではないと話しました。先輩の2人は、自分が

買われたお金の他にタイにも借金があるのだから、我慢して働かなくて私を慰めました。第一、逃げようにもどこに行けばいいかわからないし、タイにいる子どもや家族のことを思って我慢するようにといいました。

このバーで私は客を取り始めました。先輩2人は私に全て教えてくれました。また、ジャンはクスリを飲んだ時に怒りっぽくなること、また、仕事を続けさせるために女性たちを薬物中毒にしようとするので気をつけるようにと注意してくれました。私は一時間あたり4000 バーツ弱稼ぎましたが、そこから食費や部屋代を差し引かれ、残りは 2700 バーツになりました。でもそのお金は一銭も貰えませんでした。ジャンが全部ノートに記録していました。ジャンはもっと稼がせようと私を他のバーに行かせる日もありました。

ジャンと夫はしょっちゅう喧嘩していました。大抵は女性の料金のことでした。私たちは朝 8 時から深夜 2 時まで働かされ休みは日曜日だけでした。日曜日さえ客が電話をしてきたら、ジャンの監視付きで行って客を取らなければなりません。ジャンはいつも逃げたら殺されると脅しました。彼女の夫にはたくさんの仲間や知り合いがいて、空港にだって知り合いがいるのだから逃げられない。もし逃げれば、国の家族に残りの借金を払わせることになる

言いました。

私は客がくれたチップをこっそり貯め、テレホンカードを買ってタイから一緒に来た友だちに電話しました。誰か大使館の連絡先を知らないか知りたかったのです。友だちはタイ人の労働者が多く住んでいる所の近くで働いていたからです。友だちがタイ人のコックから大使館の電話番号を聞くことができました。私はそれを書き止めて置きチャンスがあればこっそり連絡しようと思っていたのですが、うまくいきませんでした。それで仕方なくこの仕事を続けるしかなく、出来るだけ逃げながら誰か助け出してくれる日をひたすら待ち続けていました。

ジャンの私に対する口調は日ましにきつくなっていき、無理やり前に働いていたマッサージ屋でまた働かせました。私はウドンタニ県出身の先輩に相談しました。この時先輩は借金の返済がほぼ終わるところで恋人もできていました。先輩は私が本当にこの仕事をしたくないのだと分かって大使館の電話番号をくれました。

ある日の午後私は大使館と連絡を取ることができました。これまでのいきさつを話し助けを求めました。その日の夜8時に職員が白人の警察官3人と一緒にバーに来ました。そのバーには私の他にタイ人女

性が10人ほどいましたが、彼女たちは仕事を続けたいと言ったので警察は介入しませんでした。警察は衣服や航空券、パスポートを取りに私を連れてジャンの家に行きました。しかし、着いてみると部屋はもぬけの殻でまるで誰も住んでいなかったかのようでした。バーにいた誰かがジャンに電話したので逃げたのです。私は着ていた服以外何一つ持っていませんでした。

警察は私に強制売春させられているもう1人の友だちはどこにいるのかと聞きました。私が知っていたのは、女性が足りない時働きに行っていたバーの名前だけでした。警察は私をそのバーに連れて行き彼女を連れ出してくれました。彼女も航空券もパスポートも取り上げられていましたが、運良くスーツケースは取り戻すことができました。

警察は私たちをシェルターへ連れて行きました。そこにはいろんな国の女性がいました。シェルターは清潔で、食事も提供されました。翌朝、職員から質問を受け、健康診断を受けた後、タイへ帰国する日を待ちました。私たちはこのシェルターに約10日滞在した後帰国することができました。

4. 新たな闘い

私がタイに帰国したのは4月の初めでした。南アフリカで2ヶ月間やりたくもないのに売春をさせられた後です。帰国後の私の所持金はほんのわずかで、バンコク近くの親戚の家に身を寄せていました。私は怖くて北にある実家に帰ることも、誰かに連絡を取ることもできませんでした。友だちや近所の人に外国で何をしてきたのか知られるのを恐れていました。一緒に帰国した友だちは一晩一緒に泊まったあとナコンサワンの実家に帰りました。

南アフリカでのつらい経験を克服し気持ちを整理するために私はずっと引きこもっていました。1週間後ようやく仕事を探し始めました。2、3仕事を申し込みましたが給料はわずかなものでした。やっと家具工場で働けることになり、17,000 バーツ返すことができました。これは南アフリカへの旅費を捻出するために車を抵当に入れて借りたお金の一部です。私が何とか人生をやり直そうともがいていた時、実家の父の病気が重いという電話が入りました。父の看病をしている兄にお金を送るためにもっと稼がなければならなくなりました。

その後、女性財団 (FFW) のプロジェクトの海外へ出稼ぎに行った女性たちの会合に参加しました。そこ

で私は出稼ぎ中に経験したさまざまなできごとや問題について話し、分かちあうことができました。また、私たちのように海外で働いていた人を支援してくれるいろいろな機関があることも知りました。そこで仕事を始めるための資金援助を受けることもできました。運の悪いことに、しようと思っていた仕事を始める前に父の身体が麻痺し、母は目が見えなくなっただのでその資金を使わなければならなくなってしまいました。私の他には誰も両親の世話をしてくれる人がいなかったからです。これまで自分の子どもとして私を大切に育ててくれたのですから、私は家に帰って両親の世話をしたいと思いました。でも、両親の食事代や薬代を払うためにはお金を稼がなければなりません。息子が伯母の世話になっておりあまり心配しなくてもよかったことがせめてもの救いでした。

今私は毎日借金の返済に追われています。もしも時計の針を元に戻すことができるならば、故郷を離れて海外で働くようなことは絶対しません。今私はつらい思い出を胸に人生を再出発しなければならないのです。

問い

1. ウアイはタイのどこの出身ですか？
2. ウアイはなぜ離婚したのですか？
3. ウアイはなぜ海外に出稼ぎに行きたいと思ったのですか？
4. ウアイが海外に出稼ぎに行くに当たって関係していた人は誰でしたか？
5. ウアイはどの国に働きに行きましたか？私たちはその国についてどの程度知っていますか？
6. ウアイはどのような仕事をしましたか？収入はどのくらいでしたか？
7. ウアイは強いられた状況からどのようにして逃げ出すことができましたか？
8. 現在のウアイの暮らしはどうですか？
9. ウアイのような被害者にならないようにするにはどのように女性を保護したらよいですか？

正義を求めて～

カンの闘い

1. 出発前

私が日本に出稼ぎに行こうと決めた時は30歳で、7歳と1歳のふたりの娘がいました。夫は麻薬中毒で私たちのことはまったく構ってくれませんでした。近所の人たちは私や娘たちのことを「あのヤク中の嫁、あのヤク中の子」と呼んでいました。その頃の私の生活は地獄のようでした。そんなある日、子どもの頃から知っている近所の人から、日本でいくつも店を出しているレストランで働かないかと熱心に誘われました。行けば月に4万バーツ稼げるというのです。それは子どもたちを何不自由なく養うことができるお金でした。

そこで私は母に相談しました。母は、このまま麻薬中毒の夫と嫌々一緒にいたところで飢え死にするだけだと日本行に賛成しました。私たちは2人ともその村の友だちのことを心から信じていました。その時の私には子どもたちの明るい将来しか思い描けなかったのです。パスポートやビザの申請、航空券を買うために、私と母は村の別の友だちから月に5%の利子で4万バーツのお金を借りました。

そのお金を日本に行くように誘ってくれた友だちに渡した後、私はさらにもう1つ別の借金の契約を結ぶように言われました。それは、ビザの申請手続きが終わった後、私が心変わりしたり逃げたりした時の保証金として、その近所の友だちの父親から16万バーツの借金をするというものでした。本当にお金を貸し借りするわけではなく、私が必ず行くということを保証するためのもので、もし行かなかった場合はこのお金を返さなければならないということでした。

その年の2月中旬、私はバンコクに着いた時、運悪くバスの事故で足の骨を折ってしまい、治療を受けなければなりませんでした。それで、モーテットのバスターミナルに迎えに来てくれていた人とは会えませんでした。後でブローカーに連絡してもう一度迎えの人に来てもらいました。その後、私は他の女性たちと一緒に4階建てのアパートにしばらく滞在しました。出発までおよそ2週間待ちましたが、その間は食費として1日100バーツもらいました。他の階の女性たちと話すことは禁じられていましたが、同じ部屋の人たちとだけは話すことができました。そこに居た人たちは皆日本のレストランに働きに行く人で、それぞれブローカーに4万バーツ払ったということでした。

出発の日を待っていた間、入国管理官の質問に答えられるように、またレストランで接客できるようにな

るために日本語の練習をさせられました。出発の前に別の人に来て、着て行く服やスーツケースなどを一緒に買い揃えてくれました。

3月2日、私は他の3人と一緒に日本に出発しました。他の3人は女性が2人と男性が1人でしたが、日本に着いた時男性は入国審査を通過できませんでした。その時初めて私はパスポートの名前が自分の名前ではないことに気づきました。しかし日本への入国スタンプを押された後は、そのパスポートを二度と見ることはありませんでした。迎えに来た人は私を狭い部屋へ連れて行きました。そこには既に2人の女性が住んでいました。パヤオ県出身の女性と彼女のインドネシア人の夫が私たちの監視人でした。そしてここで私は村は違いますが同じ郡出身のガイさんと知り合いました。ガイさんは2週間前に日本に来たということでした。ガイさんに、日本に来たということは片足地獄に突っ込んだのと同じということが分かっているかと聞かれましたが、その時はガイさんが何を言っているのか意味が分かりませんでした。

監視人のタイ人女性が私に「ここでどんな仕事をするのか分かっているの?」と聞いたので、「レストランで働くために来たのよ」と言いました。彼女は笑って、「本当にここで何の仕事をするのか知らないの?ここにはレストランなんか無いよ。あんたは売春宿に送

り込まれたんだよ」、「それに自分の借金が一体いくらなのか分かっているの？」と聞きました。私は「借金なんかないわ」と言いました。ここに来るのに必要なお金は全て村の人から借りて支払っていたからです。しかし彼女は、ここに来た女性は全員1人128万パーツの借金を返さなくてはいけない、というのです。

100万パーツ以上もの借金なんて、そんな大金を一体どうやって返せというのかと私は恐ろしさの余り大声で泣きました。借金を返す方法は売春しかないことが分かりました。もしそうしなければ殴られるか飢えるだけです。私には選択肢はありませんでした。私は運に見放されたと思いました。

2. 脱出

私たちは売春を強いられました。たくさん稼いだのですが一銭も貰えませんでした。私は子どもたちのことを思って毎晩泣き明かしました。私の母はブローカーから良いことばかり聞かされていました。母が電話してくれた時は、常に誰かが側で見張っていましたので私は良いことばかり話すしかありませんでした。また、ガイさんと私はきれいな格好をした写真を撮られました。家族に楽しく元気に過ごしているように見せ、借金を返し終えたら仕送りをするからと約束させ

られました。私たちの仕事に休みはありませんでした。生理の時さえ客を取れるように膣の中に小さいスポンジを入れさせられました。もし客に生理中であることを知られると一回につき5千バーツの罰金でした。こうして私たちの借金はさらに膨らんでいきました。その他にも私たちは部屋代や電気・水道代、電話代を払わなければなりませんでした。

私たちは週に1度だけタイ料理の食材店にタイ食品を買いに行くことが許されていました。その店は出入り口が一つしかなく店の前でガードが見張っていました。私が働き始めて3ヶ月くらい経った頃、その店のトイレの入り口あたりでタイ人男性とすれ違いました。彼は私に借金はいくらかと聞きました。なぜ彼が私に借金があることを知っているのだろうかと思いに思いましたが、彼は日本に来た女性はみな売られて借金を返すために働かされているのだと言いました。

彼は給料が出たら助けに行くからそれまで我慢するようにと言って、後で連絡するからと電話番号を聞いてきました。私は電話番号を教えたのですが彼が助けに来てくれることは期待していませんでした。日本に着いた時から誰も信じられなくなっていたからです。唯一の望みは生き延びてもう一度子どもたちに会うことだけでした。

仕事を始めて 5 ヶ月目、私の借金ももうすぐ払い終わる日が近づいていました。しかし私は監視人の女性が電話で他のママさんに、私の借金がもうすぐ終わるからまた他の所に売ると言っているのを聞いてしまったのです。私はまたしてもひどい目に会われるのかと驚き、怒りました。私とガイさんは、私たちはなぜこんな目に遭わなければならないのか、なぜしてもいない借金を負わされるのかと話しました。

私たちはもしどちらかがここから逃げられたら絶対訴えて罪を償わせてやろうと約束しました。監視人の女性は私とガイさんがよく話をしているので疑い始め、私たちを別々のところで働かせるようになりました。私は怒って前に助けに来ると約束してくれていた男性に連絡しました。

彼はノップという名前でした。彼はとても親切で私とガイさんを助け出す計画を話してくれました。その計画とは、まず彼の友だちがガイさんを助けに行き、それから彼が私を助けに来るというもので、うまく逃げ出せた時にはノップの部屋で落ち合うことになっていました。彼は私を買うふりをすることにしました。監視人が私を待たないでよいように 1 泊で買い、ホテルに行きました。真夜中過ぎにノップと私はホテルから逃げ出し彼の部屋へ行きました。そして次の日の夕方、ガイさんとノップの友だちもそこに来ました。

私たちはタイへ帰してもらうために警察に行くことにしましたが、まずは航空券を買うためのお金が必要でした。そこで次の日ノップが、タイ人がたくさん働いている水産加工工場に私たちを連れて行ってそこで働くことにしました。翌朝テレビのニュースでタイ人女性が殺されたことを知りました。しかもその女性の名前はガイさんの監視人の名前だったのです。私はガイさんに逃げ出した時のいきさつを聞きました。

ガイさんの話によると、殺されたガイさんの監視人の女性はガイさんが逃げようとしていることを知りました。そこで彼女はガイさんを殴って、誰が助けようとしているのか聞き出そうとしました。助けに行った男性は殴っている音を聞いて急いでドアを壊して中に入り、ガイさんに逃げるようにいいました。そして後で追いかけて来た彼は、監視人の女性が邪魔して逃げられなかったので、争っているうちに誤って殺してしまったと言ったそうです。その女性はインドネシア人の夫に電話して、私とガイさんが逃げたので急いでヤクザに追いかけさせるように言ったのです。そこで彼は、私たちを追いかけさせないようにと彼女に暴力を振るい運悪く彼女は死んでしまったのです。

亡くなった女性の夫が、妻を殺したのはガイさんだと警察に話しました。それでガイさんと私は逮捕されました。私たちは警察で取り調べを受けノップと私は関

係なかったのが釈放されました。そして私たちは同年 9 月ようやくタイに帰ることができました。

日本の裁判でガイさんに7年半、ガイさんを助けた男性に10年の判決が出ました。しかし、ガイさんはその後、卵巣癌の末期だと分かり、刑期を短縮してタイに帰国することになりました。今から 3 年前のことで、タイに戻って家族に看取られながら亡くなりました。でも、彼女を助けた優しい男性の方は、刑期を終えるまで日本で服役しなければなりません。

3. 正義を求めて

私は手ぶらで家に戻りましたがそれでも日本での地獄から抜け出せてとてもうれしく思いました。私は母とガイさんの家族に何があったか全部話しました。私たちは判決のために一緒に戻ってくるができなかったガイさんをほんとうにかわいそうに思いました。私たちは私とガイさんを騙して地獄の苦しみを味わせた近所の家族を警察に訴えました。

私たちが訴えた日から私と家族に対するあらゆる脅しが始まりました。夜家に石を投げられたり、家の裏庭にヤーバー（合成麻薬）を隠されたこともありました。彼らは隠しておいて警察に通報しましたが運良

く証拠が不十分で私たちは逮捕されませんでした。子どもがブローカーの家の前を自転車で通って学校へ行く時には、いつ消されても知らないぞと脅されました。また彼らは母に、私のことを、娘の仕事をめちやくちやにした悪い人間だ、こうなると分かっていたら日本には絶対に行かせなかったのと言いました。私の母もうちの子をこんな風に売り飛ばして働かせると知っていたら絶対に行かせなかった、と言い返しました。

彼らは、私と子どもたちはいずれ住むところさえなくなるだろう、自分たちはお金がたくさんあるのだから裁判所を丸ごと買うことだってできる、私たちが裁判で勝つことなんかあり得ないと脅しました。子どもたちの身の安全のために私は何度も引越しをしなくてはなりませんでした。娘からはお母さんは何度転校をさせるのかと聞かれました。クラスで1番を取ったこともあった娘の成績は少しずつ下がり始め8番まで下がってしまいました。

私はこのような脅しを怖いと思ったことは一度もありませんでした。私の日本での経験の方がもっとひどかったからです。私が求めていたのはただ正義だけでした。私の訴えを受け取った警察は、事件は既に検察に送られたので検察に問い合わせるようと言いました。私はほぼ毎週のように検察に電話して進

捗状況を尋ねました。87 日が過ぎました。あと残り 3 日で起訴できなくなるにも関わらず検察はまだ起訴するかどうか結論がでていないと言いました。

私の事件を担当した警部は、私にバンコクの最高検察庁行くようにと言いました。私が会えたのは検察庁長官の秘書でしたがとても親身になって話を聞いてくれました。私は全ての証拠を提出しました。約30分たって戻って来た彼はこのケースは必ず起訴されるから心配しないで待つようにと言ってくれました。その夜は県庁所在地まで戻って泊り、翌日県の検察事務所に手続きの進行状況について聞きました。検察官から私のケースは昨日の午後起訴されたと聞き私は彼の支援に心から感謝しました。後で私はこの検察官が異動したと知りました。もし私が彼の勧めで最高検察庁まで行っていなかったら、私のケースは起訴されなかったかもしれません。

私が村に戻ると、母が昨日ブローカーが警察に逮捕されたと言いました。しかしその 2 日後彼女は保釈金を払って出て来ました。ブローカーの母親はバイクで私の家の前を通り、「最高検察庁に訴えるなんて何てことをしてくれたんだ。お前のせいでこっちは35万パーツも払わされる羽目になった」と罵りました。それで私は検察の手続きになぜあんなに時間がかかったのかやっと分かりました。事件が起訴になっ

たあと私と家族への脅しはますますひどくなり、とうとう私は2人の子どもを連れて東北地方に住むノブの所へ行くことに決めました。しかし私の母は、自分は年を取っているので誰も危害を加えたりしないだろう、心配なのは子どもや孫の命だけだから家に残ると言い張りました。

私の事件の裁判は3年かかりました。その頃は私のような目に会っている女性を支援してくれる組織や機関について全く知りませんでした。私は裁判中は、交通費やその他の費用を捻出するためにお金を稼いでどうにかこうにかやりくりしていました。被告の父親、母親、娘は毎回日程を変えてできるだけ時間を引き延ばそうとしました。最終的に被告3人に懲役13年の判決が下されました。しかし、父親と母親は控訴したため娘だけが服役しました。

判決から1年後、ガイさんはかなり病気が悪化してタイに戻ってきました。医者は残りあと2ヶ月と宣告しました。ガイさんの帰国によりタイと日本の間で訴訟に関する協力調整が行われました。ガイさんは被告として裁判で、騙されて日本で売春を強要されたと証言していました。私は裁判には交通費や部屋代などお金がかかるのでこれ以上正義を求めて裁判を続けることを躊躇し始めていました。でも日本の弁護士は私に、人身取引ブローカーに対する民事上の

損害賠償請求をするべきだと勧めました。その後、タイの弁護士協会の弁護士に相談に乗ってもらうことができましたので、私とガイさんの損害賠償請求のための民事訴訟をしました。

ガイさんが亡くなった今もまだ民事訴訟は終わっていません。私自身ずいぶん遠くまで来たような気がします。疲れたと思うこともありますが、もし私が立ち上がって正義を求めなければ、他の誰も私の人権を守ってくれないと思います。もし黙ったままだったら私の経験は弱い人に付け込もうという人が多いこの社会で起きた不運な話で終わってしまっていたでしょう。だから私は正義を求めて闘い続け、その実現を待ち続けるつもりです。

4. 新しい人との再出発

現在私は、子どもたちと、異国の地で私を地獄から救い出してくれ、その後私の人生のパートナーになったノップと一緒に暮らしています。私とノップの間には息子が1人います。彼と一緒に暮らすようになり彼のことを知れば知るほど、彼がどんなに良い人か分かってきました。最初彼の家族は私と子どもたちを手放しで受け入れてくれたわけではありませんでしたが、私たちは誠実に辛抱強く手を携えてその時期を

乗り越えることができました。

共に人生を歩み始めて以来、ノップは一度も私のつらい過去のことには触れません。私たちは一緒に頑張っ
て子どもたちの将来のためにできる限りのことをしようと思っ
ています。そして、子どもたちにはできるだけ高い教育を受けさせ、私のような苦しみを味わうことのないようにしたいと思っています。

ノップはこれまでも私たち家族のためにずいぶん努力してきましたが、もう一度海外へ出稼ぎに行くことに
しました。ノップは私たちがよりよい人生を送れるようになるためには苦勞は厭わないと言います。

私は私たち親子がまた一緒に暮らせるようになる日を楽しみにして待っています。私はノップと一緒に
なる運命だったのだと思うことがあります。ノップは私が苦しい時にはいつも私の側にいてしっかりと支えて
くれます。私たちは今はまだ暗いトンネルの中を歩
いていますが、いつかは私たちを導いてくれる明るい光を見ることができるといことを知っています。

問い

1. 誰がカンに日本へ出稼ぎに行くように誘いましたか？
2. カンは渡航にあたってどんな費用を支払わなくてはなりませんでしたか？また、どのようにして日本に入国することができましたか？
3. 彼女の仕事や借金はどのような状況でしたか？
4. 誰がカンとガイを監視人から助け出しましたか？また何が起きましたか？
5. 訴訟するに当たってはどのような困難に遭いましたか？
6. もしあなたがカンならブローカーを訴えますか？それはなぜですか？
7. あなたはカンの話からどのような教訓を得ましたか？

新しい人生へ向かって～

パーンの話

1. 悪夢のような日々

私はシーサケート県のある村で生まれました。子どもの頃の私は周りの友だちたちと同じように、両親の手伝いをして働かなくてはなりませんでしたが、高等学校までいくことはできませんでした。私は若くして結婚し、両親の家の近くで暮らしていました。子どもが生まれてからは、子どもにもっと良い将来を与えたいと思って必死になって頑張って働きました。

働くと言っても私のようにほとんど教育を受けていない女性の選択肢は限られています。同じ村の人が海外から帰ってきて、村の女性たちに、彼女と一緒にイタリアのレストランで仕事をしないかと誘っていました。きつい仕事ではなく給料は良いと聞きましたので私は母に相談しました。母は子どもたちの面倒は見てくれると言いました。母と私は金策して回り、何とかお金を借りて仲介費用と渡航費用を支払いました。

私は出稼ぎに行ったら、出来るだけたくさん稼いで、家を建て、子どもたちにはきれいな洋服を買ってあ

げたいとあれこれと夢を思い描いていました。しかしその夢はイタリアに足を踏み入れたとたん粉々に崩れ去ってしまいました。一緒に行った友だちと私は一軒の家に連れて行かれましたが、そこはレストランの仕事などではないことが分かりました。私たちは売春しなければならなかったのです。私たちは自分たちがイタリアのどこにいるのかさえ分からなかったのです。

知らない国で、知る人もなく、誰にも助けを求めることもできず、私たちの世界は真っ暗になりました。イタリアでの日々はとても長く感じられ、毎日、いつになったら母や子どもたちとまた会えるだろうかということばかり考えていました。幸いなことに、ある日、私たちが共同生活していた家に警察が踏み込んできて、私たちは救い出され、タイに帰国するまでイタリアの機関のお世話になりました。

空港に着いた時、タイの機関の職員が迎えに来ていて、これまでのいきさつを訊かれました。一緒に帰国した友だちと私は、私たちを騙し、売春というこれまで考えたこともない仕事を強要した村のブローカーを告訴したいと思っていました。職員は私たちが警察に被害届けを出すのに付き添ってくれました。そしてその後の裁判手続きも助けてくれました。

2. 苦しみを乗り越えて

家に帰って再び母と子どもたちの顔を見ることができ私は幸せでしたが、同時に悲しくもありました。というのは出発前に母や子どもたちと約束した夢をかなえることができなかったからです。私たちは孤立していました。近所の人たちは、私がイタリアで何が起こったか話しても全く信じてくれないのです。そして、私がイタリアでお金を稼げなかったものだから仕返しをしようとしているだけだと信じ込んでいました。私は村の人はお金持ちだけを信じるのだと思いました。村の人たちと私の関係はすっかり変わってしまいました。

ある朝私は僧侶にお布施をするための食べ物を用意して待っていました。徳を積めば人生で二度とひどい目に会わないだろうと思ったのです。しかし、村の僧侶であるブローカーの父親は、私が用意した食べ物を受けとらず家の前を通り過ぎて行ってしまいました。私が彼の娘を訴えたことに腹を立てていたのだと思います。

私は毎日苦しみました。いろんな思いに苛まれ、誰もその苦しさから救うことはできませんでした。母は私が気がおかしくなるのではないかと心配して病院の精神科に連れていきました。私は自分に起こったひどいことを考えなくとも済むのならと、渡された

薬はすべて飲みました。時には短絡的に自殺を考えたこともありましたが、母や子どもたちのことを考えるとそれはできませんでした。

ある時、女性財団から私のように外国でひどい経験をした女性たちが集まって話すので来てみないかと誘われました。そこではみんなが心を開いて自分の経験を語り、新しい人生を拓くための解決策を考えようとしていました。私は人生にかすかな光が見え始め、これからの人生を生きていく希望が見えてきたと思いました。そして少しずつ強さを取り戻し、顔を上げて人と目を合わせて話せるようになりました。また、自分の経験を他の女性に話せるようになりました。

私は訴訟の進み具合を確かめるために時々バンコクに行かなくてはなりませんでした。私には、ブローカーはお金があるから良い弁護士を雇って自分を守ることができ、審理はちっとも進まないように思えました。おまけに、最終的にそのブローカーは保釈になり、治療を受けるためだと言って再びイタリアへ戻って行ってしまったのです。私も友だちも、保釈になったことに驚きなせだろうと疑問を感じずにはいられませんでした。

時々私は、私たちのような女性が正義を得る日がくるのだろうかと思います。私たちのような経験をした

人でなければ、この経験がどんなに精神的トラウマとなるのかは分からないと思います。裁判所の判決だけが唯一私たちが被害者であることを証明してくれ、そして正義の実現だけが私たちの傷ついた心を癒してくれるのです。

3. 新しい人生に向かって

女性財団の会合では私のような経験をした女性が集まり、他の被害者とあって話をすることができます。私はこれに参加し絹織物をするための資金を受けることができました。私の母は織物がとても上手ですので、家族を養っていくために、これからは農業と絹織物で収入を得たいと考えたのです。

しかし、まだ私の人生の苦しみは終わりませんでした。イタリアから戻ってきた時、サックという新しいパートナーと出会いました。彼は私を愛している、子どもたちの面倒も見ると言いました。サックは妻とは離婚した、これからもう一度私と新しい家族を作りたいと言いました。私たちは約1年間一緒に暮らし、私は妊娠しました。しかし、サックは言っていたこととは違って妻とは別れていなかったのです。

私はまだあの日のことをよく覚えています。サックが

トイレに入っていた時彼の電話が鳴りました。私が電話を取ると女性の声でサックはいつ家に帰ってくるかと聞きました。私とその女性にあなたは誰なのか尋ねると、彼の妻だという返事が返ってきました。サックがトイレから出てきた後問いただすと、彼は私を連れてその女性に会いに行きました。

サックが妻に私のことを単なる知り合いだと言った時はひどく傷つき泣きました。私が信頼しており、私の人生を託していたサックの本当の姿が見えたからです。私が彼を責めると、彼の妻は私をなじり殴りました。サックは自分の妻が殴りやすいように私の腕を掴みました。最後に彼女は私のお腹を蹴りました。

私はその時既に妊娠4ヶ月でしたので蹴られた後出血してしまいました。それでも彼らは殴るのを止めようとしませんでした。それからサックの妻は私がひどく出血していたにも関わらず私を引きずって車に乗せ、警察署に連れて行き、私が彼女の夫を奪ったと届け出ました。警察官は彼女の友だちで、私の説明は聞こうともせず彼女の話信じていました。ようやくもう1人の警察官が入って来てどうしてそんなにひどく出血をしているのかと聞きました。私がいきさつを説明すると、彼は私を病院へ連れて行き、後で被害届けを出すように言いました。

病院でお腹の赤ちゃんを検査した医者は、こんなに出血がひどいとお腹の赤ちゃんはもう助からないだろうと言いました。私は泣き出し、医者にも母と妹に連絡して何が起こったか伝えて欲しいと頼みました。それから医者は私を県立病院へ送りました。ここで私は、もうお腹の中の赤ちゃんは助からないだろうと知らされました。母と妹が来た時は、私は嘆きのあまり泣いていました。母と妹はすでに起きてしまったことについてあまり深く考えすぎないように、となくさめてくれました。出血が多かったので私は入院しなければなりませんでした。

家に戻ると、母は薬草を煎じて私が元気になるまで面倒を見てくれました。私は母のことをほんとうに有難いと思っています。母はこれまでずっと私の側にいて私のことを気にかけてくれました。私は心と体を傷つけたサックとその妻を訴える決心をしました。

この時私は二度と男の人を信じてはいけないと思いました。私はもっと強くなって残りの人生を生き抜き、年老いた母の力にならなければなりません。私たちは子どもや孫たちの明るい未来のために助け合って働かなければなりません。私は母にもう二度と遠くへは行かないと約束しました。

問い

1. パーンと友だちはどこの国へ出稼ぎに行きましたか？
2. パーンは家へ戻った後どのような問題に直面しましたか？
3. ブローカーの起訴手続きの進捗はどのようなものでしたか？ パーンは正義を得ることができましたか？
4. サックはどのような人でしたか？
5. パーンは人生においてどのような選択肢がありましたか？
6. あなたの村にパーンのような出来事に直面した女性はいますか？
7. 他の女性をパーンのような問題に直面させないために私たちはどのように予防することができますか？

ここで知り合えてよかった
みんなで愛と希望を持とう
意見を持ち、挑戦する権利がある
いやなことは忘れよう 全てを忘れて海に流そう

海に波があれば
しっかりと波打ち際に立っていよう
今日から私たちの心はひとつ
明日に向けて希望と夢を持っていこう

人生を闘う女性 ウアム
2006 年

あなたは…女性だから
貧困 痛み 身を切る寒さ という現実の中
手を伸ばし 星を掴み取ろうと 希望を持つ
輝く瞳の中にある 傷跡を消そうと

あなたは…創造者だから
希望を持ち 願いを胸に 道を平らにしていく
どんなに疲れようとも
力尽きることなく 引き返すことなく 分かち合っていく

ピムタム
2007 年

人生を闘う女性グループ

(Live Our Lives Group)

「人生を闘う女性グループ」は、海外への出稼ぎで辛い経験を持った女性が集まって発足したグループである。会員は全員アジア、ヨーロッパ、アフリカなどで人身取引の被害者となった人たちである。精神を回復させたり社会復帰につながる活動を女性財団と共にを行い、人生の新たな道を模索する。また、活動を通して人身取引被害者として正義と賠償金を勝ち取るために力を尽くしている。共同作業を通じて互いを励ましあい、自分たちが故郷から遠く離れた異国の地で経験したような状況に他の女性たちが陥ることのないよう、防止活動も実施している。こうして、「人生を闘う女性グループ」は、共にこれからの道を歩んでいくために生まれた。

現在「人生を闘う女性グループ」にはタイ国内各地に50名のメンバーがおり、グループの活動に参加する新メンバーも随時募集している。

「人生を闘う女性グループ」に興味のある方は、下記の女性財団に連絡。女性財団では、これからも引き続き、グループのメンバーを支援し、彼女たちの励

みとなるよう活動を継続する。
仮連絡先

Foundation for Women
295 Jaransanitwong Rd,
Soi 62 Wat Paolohid Bangplad, Bangkok, 10700
Tel: 02-4251246; 02-4335149
E-mail: yingsoogroup@gmail.com

どんなに体が疲れても
どんなに心が弱り、希望を失っても
生きることに疲れ力尽きても
希望が手のひらをすり抜けていっても

ここに友がいることだけは知って欲しい
あなたに明るい道を指し示す
どこであれ あなたの傍にいたい
どんな時でも励みになりたい

人生を闘う女性 ニー
2008 年

広い世界で あなたは孤独でひとりぼっち
淋しい道 正しいのか間違っているのかも分からない
1人の友を探し求める
共に歩いていく道を定めていく友を

愛する友 そして戦士である女性たちよ
世界は知っている あなたが創造するためにいることを
空の彼方 澄み渡る満月の光を
あなたとわたしが共に愛でる日を待っている

ピムタム
2007 年

女性財団



女性財団は女性の人権保護・促進を目的として活動するNGOであり、女性および子どもを支援し、ドメスティックバイオレンス、コミュニティ内で起こる様々な形の暴力、そして性的暴力や人身取引など、現在女性が直面している問題について社会の認識をより深めるための運動を行っている。

活動経歴

1984年3月、海外に出稼ぎに行く女性への情報提供及び女性が騙されて性産業に従事することがないように、その予防を目的として「女性情報センター」という小プロジェクトが発足した。その他、様々な分野の職業に従事する女性のための教材の作成も行われた。

1985年、夫から暴力を受けた女性を支援し、ドメスティックバイオレンスについての啓発活動を行うために女性シェルタープロジェクトを設立した。その後1987年には、コミュニティの協力の下、子どもが性産業に巻き込まれることを防止する運動を実施するため、カムラープロジェクトが設立された。カムラープロジェクトでは、カムラーの本を教材に学校の先生を通じて啓発活動が行われた。

その他、出稼ぎ女性と子どもの人身取引に関する研究、新しい価値観の普及プロジェクト、青少年向け教材制作プロジェクト、女性と子どもに対する暴力の防止及び改善に関する協力体制を構築するための地域ボランティアの育成プロジェクトを実施してきた。女性財団は 1987 年末に登録申請を行い、2005 年に NGO 第 605 号として認可された。

目的

1. 社会的に脆弱な立場にあり、問題に直面している女性に対する支援
2. 様々な分野の職業に従事する女性のための教育及び適切な教材の制作
3. 国際連合総会にて採択された国際人権宣言に規定されている女性の権利の支援
4. 女性に関する研究及び情報の普及、女性の発展を目指すプロジェクトの実施
5. 消費者およびマスメディアの権利の促進、および公共利益のためのマスコミの活用
6. 他NGOとの連携

現在実施している活動

現在女性財団は以下のような様々なプロジェクトを実施している。

女性情報センタープロジェクト

現在、多くの女性が騙され人身取引によって搾取され、タイに帰国後もほとんどが支援機関などの情報を得ることができない。また、法的支援や保護を受ける権利があることも知らないでいる。その結果、借金、脅し、家庭内での過重な負担といった問題に直面し海外に出稼ぎに行ったり、帰国後も人身取引再被害のリスクが高い状態に置かれている。このような状況を憂慮し、女性情報センターでは、海外から帰国したタイ人女性に対してアドバイスをを行っている。

女性情報センターでは、カウンセリング、短期シェルターの手配、法的支援を受けるための調整、職業訓練施設や職業に従事するための支援基金に関する情報提供を行っている。またこの他、海外から帰国した女性が顔を合わせてお互いに励まし合えるよう、グループ活動も行っている。

外国人女性と子どもの支援プロジェクト

女性財団は、様々な形で搾取や権利の侵害を受けた人身取引被害者である外国人女性や子どもが、損害賠償を含む法的保護を受けることができるように支援している。また、入国管理局の収容施設では、職員と協力して人身取引被害者の認定に当たる職員と協力し、暴行を受けたり帰国のために助けを必要としている女性や子どもを支援している。また、収容施設や政府のシェルターでは、女性や子どもに対し、騙されないよう、身を守るための情報を提供する活動も行っている。女性財団では、被害者が再び人身取引の被害者となることがないように、帰国した女性と子どものニーズを分析し、関係機関とも調整を行っている。

アンダマンの女性と子どもの人生を紡ぐプロジェクト

女性財団は、仮設住宅団地のコミュニティを含め、津波の被害を受けた地域のコミュニティで、コミュニティ内のボランティアと協力して暴力の問題を防止し、改善する運動を実施している。女性や子どもに対して、時に死に至ることもある程の激しい身体的・性的・精神的なドメスティックバイオレンスが見られるが、これらは子どもの発育に長期的な影響を及ぼし、安定した生活を送る上での障害となり、その結果

コミュニティや社会全体に影響する。

女性財団では、施行されているドメスティックバイオレンスの法律に関する情報を提供して、コミュニティでの知識を深め、理解を促進するようにしている。また、問題に直面している人に確実に支援が届くようにするばかりでなく、長期的な問題の防止と改善につながるよう、コミュニティレベルにおけるメカニズムと手法の開発を目的として、コミュニティの女性及び男性メンバーに対し、ドメスティックバイオレンスに関する認識を深め、その防止と改善を進めるための協力体制を構築している。

人身取引被害者女性と子どものためのシェルタープロジェクト

女性財団は Social Action for Women と連携し、人身取引の被害者となったミャンマー人女性と子どもの支援及び再被害の防止を目的として、人身取引被害者女性と子どものためのシェルターを開設した。社会復帰後自立できるよう、搾取されるリスクが高いまたは出身地へ帰還にあたって安全が確保されていないミャンマー人女性と子どもを支援し、人身取引被害者にとってより多くの機会や選択肢が与えられるよう活動を行っている。そして、人身取引被害者となった女性と子どもの支援において協力体制を構

築するため、また社会復帰支援のために政府及び民間機関と連携し調整を行っている。

女性差別撤廃条約実施促進及び実施状況調査プロジェクト

女性財団は、女性の発展と平和構築のためのネットワーク機関として、女性差別撤廃条約に基づくジェンダー差別の撤廃、紛争の廃絶、平和構築に関する研修実施ガイドラインを作成し、女性に関する活動を行っている市民団体を含む、政府及び民間の職員に対する講習を実施している。

この他にも女性財団は、政府の女性差別撤廃条約の実施を推進するために、少数民族の女性ネットワーク、女性障害者ネットワークといった関連ネットワークや機関と連携して報告書を作成し、女性差別撤廃委員会の勧告の周知に努めている。また、各地域のネットワーク機関と協力して女性差別撤廃条約の実施状況調査を行っている。また、人身取引対策法、ドメスティックバイオレンス被害者保護法などの法律の施行状況に関する調査を行い、さらに男女平等促進法などの新しい法律の制定についてもモニタリングを実施している。

女性財団の活動への支援として、皆様からの寄付を受け付けております。

・小切手または郵便為替

PO Box 47 Bangkok Noi 10700

・銀行振込

Kasikorn Thai Bank, Sathorn Branch

(Foundation for Women)

口座番号038-2-18085-2(普通預金)

クンインアンボン	ミースック	顧問
シーサワーン	ポワウオンペート	顧問
チャルムシー	タンマブット	顧問
シリポーン	スクロバネック	理事長
アモラー	ポンサーピット	副理事
ランシマー	リムピサワット	理事・秘書
クルツタヤー	アーチャワニットクン	理事・会計
ダーラーワン	タンマーラック	理事
スタティニー	サンタブット	理事
アンチャナー	スワンナーノン	理事
チョーティップ	チャイチャー	理事
ワラポーン	チェムサニット	理事



「出稼ぎに行ったら、出来るだけたくさん稼いで、家を建て、子どもたちにはきれいな洋服を買ってあげたいとあれこれ思い描いていました。しかしその夢はイタリアに足を踏み入れたとたん粉々に崩れ去ってしまいました。レストランの仕事などではないことが分かりました。私たちは売春しなければならなかったのです。」

— パーンの話から

「もしも時計の針を元に戻すことができるならば、故郷を離れて海外で働くようなことは絶対しません。」

— ウアイの話から

「私はこのような脅しを怖いと思ったことは一度もありませんでした。私が求めていたのはただ正義だけでした。」

— カンの闘いから